

# 『リグヴェーダ』を読む：ヴァシシュタとヴァルウナ（第四三回光華講座）

著者	後藤 敏文
雑誌名	真宗文化：真宗文化研究所年報
巻	22
ページ	49-106
発行年	2013-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1108/00000659/">http://id.nii.ac.jp/1108/00000659/</a>

第四三回 光華講座

『リグヴェーダ』を読む

—— ヴアスィシユタとヴァルウナ ——

東北大学名誉教授

後 藤 敏 文

今日の話の背景となる事柄について、私の方から時間をかけて話さなければならいところを、前もって大変要領よく説明していただきまして、楽になりました。どうもありがとうございます。

最初にご紹介頂いた講座のテーマ「真実」ということから申し上げますと、私にも、多少誇りにしております「サツテヤとウースイア」という論考がありますので、<sup>①</sup>これをお話した方が良かったかとも思いますが、今日は少し違った角度から、普段私たちにあまり馴染みがあるとはいえない文献の一端を紹介したいと思ひまして『リグヴェーダ』を選びました。『リグヴェーダ』

とは何かということを論じても得るところがないわけで、学校では「〜とは何か」という問いの立て方に直面することが多く、そのために私たちの頭が何か考える機能の一部を発揮できずにきたようにも思えますので、今日はいきなり『リグヴェーダ』の中身を少し紹介したいと考えています。と言いますのも、私自身この『リグヴェーダ』を読んでいて、『リグヴェーダ』の詩人たちの「頭脳」というもの、ことばによる「取り組み」に非常に共感を覚え、驚くべき集中度をもつて議論を戦わせた世代があったということに、読めば読むほど感銘を受けておりまして、そのことが今を生きる私たちにとつても本当はとても重要なことだと考えているからです。先程一郷先生が少し触れてくださいましたが、今日、我々はグローバル化という世界に住んでおります。そのグローバル化は、実は、今日までずっと続いてきた部族闘争の発展形と私は解釈しているのです。『リグヴェーダ』は部族闘争のイデオロギーに関する原初形を私たちに教えてくれる、ほとんど唯一の文献といつてよいと思います。そのことを知っておかないと、私たちが今ここにいるということ、歴史の中で、日本にボツンといて、インド・ヨーロッパ語族のグローバル化の環境の波をまともに被って生きているということを分らないと、私としては、生存というもの、自分の生きているということの意味がよく分からないのではないかと思います。その事情を理解するために、『リグヴェーダ』は直接的な原資料です。そして、そのことがよく知られていないわけですね。ですから『リグヴェーダ』を取り上げてみました。

『リグヴェーダ』というのは、先程「オペレーション」ということばが紹介の中にありました

が、世界を操作、宇宙の運行を操作するということを部族全体に対して責任を負っていた祭司たちが、言葉というものを用いて、それによって仕事をしていた、その道具ということができま  
す。その言葉を「マントラ」と言います。仏教のマントラ（真言）と同じ語ですが、要するに彼  
らの職業上の道具、一種の武器であって、そのことばという武器を使って決闘までしていま  
した。その決闘を越えて残った、「間違ったことを言ったら頭が七つに弾け跳ぶ」という、後の法  
華経にあるものと同じ表現がヴェーダ文献には遺されていますが、「弾け跳ばなかった」人の言  
葉だけがここに残っているといえるわけです。それら選りすぐられ、世代を超えて吟味されたこ  
とばの最古のものが、紀元前一二〇〇年くらいに固定された形で今日まで伝わっているわけ  
です。私たちの能力の至らなさもありますが、まず、愚直にその書いてある通りに訳してみても  
を探らないと、正しいはずのことばの意味が分からないのです。そうした事情をも少し紹介した  
いと思います。ここに書いてあることは、比喩表現としてではなく、そのままきっちり読んで詰  
めて考えると、初めて「なるほど」と分かる世界です。ですから、日本語という便利な道具を、  
原典を忠実に表すという形に利用すべきで、「日本語だったらこれはこう表現される場面だろう」  
と決めてかかりますと、『リグヴェーダ』を自分たちの風に合わせてまず誤解することになりま  
す。誤って理解されてしまいます。そうした例の一つとしても、今日取り上げる讃歌はふさわし  
いのではないかと考えました。『リグヴェーダ』とは何かということについては、先ほど一郷先  
生がおっしゃってくださいましたことととりあえず十分かと思いますが、また後で触れること  
になるかもしれません。

## 「夜の太陽」

『リグヴェーダ』VII 88。私は昔、一九九四年ですが、ある人のピンチヒッターとして翻訳したものがありまして、そのコピーをここにお配りしました。まずそれを読んでみましょう。原文が二頁目の上の方に印刷してあります。このような形で伝承されています。どうしてわざわざ原文を挙げたかと言いますと、私が昔ドイツに留学した時に、日本人の友達に何を専門にしているのかと尋ねられて、「文法の、こういう仕事をしてるんだ」と答えると、「昔のインドにそんな活用なんてあったの？もうできてたの？」と言う人がおりました。文法構造、語形の持っている役割が違い、活用というものによつて、いわばギアチェンジを用いて表現される言語です。従つて予め言うべきことが頭の中にないと使いこなせない、文法的に難しい精巧な言語なのだということを知って戴きたくて、ここに印刷しておきました。音楽的なアクセントですから、これは昔、本当は *prā śundhyānam* 「プーラ、シュンノデユヴァン……」と、ノの次の音節を高く読んでいたはずです。しかも割とゆっくり読んでいたという証拠があります。「一単語一アクセント」で、アクセント記号が付いている音節(母音)は高く、日本人にはそれができますが、五度高く読む。他のところは低く読む。アクセントがついてない単語はこの文中ですと *vasiṣṭha* 「ヴァスィシュタ」と *bharasva* 「バラッスヴァ」。これは呼びかけと定動詞です。この現象は日本語と同様で、「僕はね、昨日、○○さん…」というふうに、呼びかけ部分を少し外しますね。そして、

「学校へ行ったんだよ」と下げますね。それによって言いたいことの基本部分が終わったというサインになります。これと反対に、尻上げことは相手の注意を引き続けるテクニクと言えます。ほとんど同じ現象が起きていまして、日本語の場合、呼びかけを低くは言いませんが、低く言うと、脅しに近い感じになるかと思いますが、そういう重みを置く単語を低く発音し、普通の単語はアクセント付きで発音する。このように、それが今日まで伝わっています。それを正しく伝えるために、いろいろな、単語の並び替えとか順列組み合わせのような操作をした読み方を複数考案して、それを子どもに身体を揺すりながら暗記させて今日まで伝わっています。ところが、私たちが『リグヴェーダ』の朗唱と言って、学者などでもそうですが、有名な人たちが読むのを聞きますと、全くそうなっておりません。彼らは「*prasindhy* *iva* *am*……」というふうに読みます。何かというと、単語の意味を伝えたいのではなくて、テキストを読み上げているのです。朗詠です。朗詠のスタイルは違ったアクセントになっていて、私の推測では古典期のラテン語のアクセントと同じ現象が起きています。ですから、いろいろなテープとかその他で『リグヴェーダ』を聴くこともできますし、YouTube などでも聴くことができますが、それらは全て違う、紀元前後に起きた新しい機械的アクセントによる読み方です。本当の姿はここに書いてあるこの姿です。『リグヴェーダ』全体では、このような形に印刷しますと、六〇〇〜七〇〇ページぐらいの分量が今日まで伝わっています。それを訳すと左ようになります。私は急に仕事が入ってしまったって充分準備ができず、飛行機の中で…、別の環境で緊張しながら見ますと人は「これ違うな」などと気づく箇所もありまして。この VII 88 という七つの歌、これ一つを

本当に自分が納得できるまで訳すだけでも一人の学者が一生の集中力を必要とするものだと思います。これは『リグヴェーダ』だからそうなのではなくて、実は「物事全て」そうなのです。私たちはそこを何となく気楽にやり過ごしているだけで、これは現代語の問題でもありますし、他方、書いた本人も分からないということもあるわけで、文学部の仕事というものはそういうものなのだと思います。私は普段そういうことを専門にしておりますから、一般的なお話に慣れておりませんで、分かりにくくなるかもしれません。今日はベースをゆつくり保って、少し気をつけてお話するよう努めたく存じております。

仮の訳ということになりますが。「綺麗な（ヴァルウナ）：」「ヴァルウナとは何かということの後でお話します。イメージが掴めないといけませんから、仏教で水天様と呼ばれる神様だと言っております。

「綺麗な（ヴァルウナ）の最も気に入る考えを、報酬を恵むヴァルウナに、ヴァスィシユタよ、捧げよ、彼が、かの崇拜すべき者をこちらへ差し向けるように、千の能力を備えた、丈高い（背の高い、ごつい）偉丈夫（太陽）を」

こう書いてあります。ここで既に先ほど申しましたような問題が出てきます。「報酬を恵む」という単語があります。この背景には、先ほど一郷先生が簡明に紹介してくださいました、神と祭司との取引関係、「祭司が神に何か正しいことを言挙げすると、その正しさと神がそれを是認する量に応じた代償を必ず実現してくれる」という構造があります。「報酬を恵む」、「恵む」とい

う単語は正確ではないと今は思います、「きちんと報酬、賃金を払う」という意味です。これは重要な概念でして、『リグヴェーダ』の神と人間との関係を正しく把握しておく必要があります。概説書などには「神様にものを頼む、願う」とあることが多いと思いますが、また、そういう場面も全くないことはありませんが、普通は命令形か、自分の意志、話し手の意志を表す表現を用いて「君は○○をすることになるのだ」と、つまりこの場合、「ヴァルウナは○○をせよ」または「することになっているのだ」という、祭官の意志が実現を迫る形で呼びかけます。ですから、神は人間に恩寵を与えてくれるのではなく、見合った代償を実行しなければならないという、神様もルタ（リタ）——私は「天理」と訳しますが——天理というものに神様もしばられているわけで、その天理に見合った行為をしなければならないという原則に立った上での言葉による取引なのです。ところが通常「報酬を恵む」の意味をそこまで汲んだ翻訳はありません。普通に読んでしましますと「気前がいい」とか「恩寵に富んだ」とか、何となく美的な、我々の通常の神経に合った美辞麗句として訳されてしまします。しかし、そう訳した途端に『リグヴェーダ』の意味は薄れてしましますので、ここははっきりと「ちゃんと報酬を払ってくれる」というきつい言い方で訳すべきです。さらに興味深いことに、このミードウシユ *mīdhuṣ*、主格形ミードウヴァーン *mīdhuān* という語の基本構成部分、ミードウは、ドイツ語をご存じの方ならご承知と思いますが、ミール *Miele* という、今でも普通に「家賃」を意味するドイツ語と同じ起源の単語です。インド・ヨーロッパ語族の遺産が、実は、あちこちに長く生きていることの一例です。その単語が使われています。既存の訳の至らない点は、今日の環境に移し替えて美化し、素



敵に訳してしまうことです。美的表現には形だけの古風な語も含まれます。それは避けねばなりません。

次の文は文法的忠実さと関連します。「彼が、かの崇拜すべき者をこちらへ差し向けるように、千の能力を備えた、丈高い(背の高い、ごつい)偉丈夫(太陽)を」。どう見ても「丈高い偉丈夫」は太陽と解釈されますが、大事な概念をはっきり口にしないのが、むしろヴェーダの傾向でありまして、代名詞さえも省いてしまうことがあり、普通に読むと誤解することがあります。「彼が」と訳した単語は関係代名詞の男性単数形です。「考え」という語は女性名詞です。しかし、「考え、私の詩が、彼、偉丈夫ヴァルウナをこちらに連れてきてくれるように」とする訳が最近では多いようです。一四世紀のインドの注釈家サーヤナは上記のように、詩人の歌がヴァルウナに働きかけ、ヴァルウナが太陽を昇らせてくれるものと解しています。ゲルトナー Geldner による一九二〇年代の訳もそのように正しく翻訳しています。しかし、ゲルトナーの訳を既に知っていた有名なリューダース Lüders という人は「太陽は毎日昇ってくるのだから、太陽を呼び出す歌があるわけがない」と言つて、偉丈夫はヴァルウナのことであると解します。ところがそうではないのです。それこそがこの歌の眼目なのです。リューダースの弟子のティーマ Thieme はさらにリューダースの説を補強して「次の単語が母音で始まるために、女性名詞<sup>が</sup>が<sup>で</sup>で現れている」などと無理なことを主張しますが、全『リグヴェーダ』を通じてそのような事例は一つもありません。これは明確に男性単数形です。このように、文法というもののが『リグヴェーダ』を読む一つの手綱となってきました。文法に従つて読む他に方法はないのです。そして、文

法に従って読むことによって讃歌の理解への道が開かれるのです。

この訳を作った時に、私も不思議に思いました。「詩人の言葉が太陽を昇らせる」というのは奇妙です。その話をうちの奥様にしましたら、「それ、『黒いオルフェ』じゃないの」と言われて、それで私にも全てが分かったのです。『黒いオルフェ』という映画をご存じでしょうか。ぜひご覧になってください。私は『黒いオルフェ』の話になると、普段そういうことは全部忘れてしまうのですが、主などところだけが覚えています。私は元々、言葉は得意ではなく画像的な人間と自覚しておりまして、あれこれの情景は覚えているのですが、話のあらすじはよく分からない。『黒いオルフェ』の場合には比較的よく覚えています。最後のシーンが泣かせるところです。オルフェ（オルフェウス）、ブラジルの貧民街、リオデジャネイロの岩山の上にある貧乏集落に住む市電の運転手ですね。カーニバルのグループのキャプテンです。カーニバルの前日、帰ってきた電車にとっても綺麗な女の人に乗っている。その女の人は死神の追跡を逃れて貧民街に従姉を訪ねて来たのです。それがギリシャ神話でオルフェウスの妻とされるユリディス（エウリディケー）です。彼女は、カーニバルの夜に、死に神に追い詰められて死んでしまいます。オルフェは彼女を探して病院、警察、そしてその魂を求めて祈禱師の所へ行ったりします。そこに例の振り返って見てしまうシーンがうまく挟み込まれています。死体置き場でとうとう亡骸と出会い、死体を抱いて明け方近くに家に帰ってくる。すると彼の婚約者が嫉妬から火を放ち、怒って石を投げつける。その石を避けようとして、岩山から落ちて死んでしまいます。オルフェには、彼を慕うこましゃくれた子供たちが三人いました。本当にまだ小さな子で、男の子二人、女の子

が一人。男の子の一人が「おい、オルフェ死んじゃったよ。お前がこれからオルフェだろ。早くギターを弾いてくれ。太陽が昇っちゃうじゃないか」と言うわけです。そうすると「分かった」と言ってその子が超絶技巧でサンバのギター演奏をします。女の子は信じられない足捌きでサンバを踊る。すると男の子が「ほら、お前はやっぱりオルフェだ。太陽がちゃんと昇ったよ」と言っている。つまり、太陽を昇らせる音楽を毎日オルフェが歌い奏でることによって、太陽が正しく昇る、太陽を正しく昇らせないと大変なことになる。そういう観念があることに気づかされます。

そうした目で改めて見てみますと、この観念は各地にあるようで、ブラジルの作家が何故…、私はギリシャのオルフェウスの著作を断片まで全て探しましたが、そのような記述はありません。ただ、オルフェウスと朝日との間に関係があると思っただけで、読めないことはない断片が少しあるだけです。ブラジル芸術の天才性というものがあるのでしょうか。ブラジルの脚本家はどこからこのモチーフを持ってきたことになります。どこから取り入れたかという疑問は十分探るに値することですが、たぶん、パリのジャン・コクトー一門辺りのサロンで学んだのではないかと、勝手に思っております。フランス文学を専門にしている同僚に尋ねましたところ、「ああ、それはフランスから地中海、あの人たちはエジプトとかあちら側に対する憧れが強くって、そういうのはたぶん文学サロンの常識なのだよ」と教えてくれました。そう思っております。ところで、宮城学院女子大学に山形孝夫先生という、キリスト教関係で名の知れた先生がおられます。その先生が昔賞をもらった本に、コプトの修道院の生活を書いたものがあります。そこ

にはつきりと書いてあります。コプトの修道院はエジプトのナイル川の西側、ナイル川の西は全  
て死者の領域とされ、普通の人が生活する場所ではないそうですね。ナイル川の西側に、後のヨ  
ーロッパの修道院の基になった複数の修道院が今日まで続いているそうです。そこで一年  
か二年か修行をして来られた先生です。その時の経験ですが、午前二時過ぎとか、ずいぶん早い  
時間が挙げられていたように記憶しますが、夜明け前に一同修道院から出て、一列にナイルを向  
いて並ぶ。つまり東側を見て横一列に並ぶ。そこで足を踏みながら祝詞を唱え続けて、太  
陽が昇ると解散する。これを毎日やっているというのです。要するに、地中海沿岸の遺風に、今  
日まで残っている太陽を昇らせるための儀礼というものがあり、そのことをたぶんブラジルの脚  
本家は知っていて、オルフェウスのお話を映画に見られるように組み立てたものと、こんなふう  
に勝手に思っています。「太陽が昇るのは当たり前」と思った瞬間からそうした可能性が閉め出  
されてしまいます。『リグヴェエダ』には彼らの理解が正しい文章で記されていると考えるべき  
です。『黒いオルフェ (Orfeu Negro)』を是非ご覧下さい。ギリシャ神話を現代に移したもので  
す。見事に成功していると思います。

「付記…その後、少しく調べたところ、原作はマルクス・ヴィニシウス・ダ・クルス・エ・メ  
ロ・モライスという、「イパネマの娘」の作詞者として知られる詩人による戯曲に遡るとい  
う。上記の記述にはかなり危うい部分があると思われ、一段のご注意を乞う。」

「彼の全貌に出会って、今はここに、私は燃えている祭火の前方側がヴァルウナの顔だと思

う」

と書いてあります。「全貌」などと訳す人は普通ではないのですが、これも重要な点です。「太陽を見ると」「太陽が見えるようになる」と、ではなくて、この単語にはその前に「完全な」という前置詞がついています。これははつきり訳さなければなりません。「太陽が完全に地上に現れた瞬間に、祭火がヴァルウナに転ずる」ということです。例のカトリックのミサの時に、あるお祈りを唱えたと、その瞬間からワインがキリストの血とみなされ、パンがキリストの肉とみなされる。そういう儀礼の技巧、トランスサブスタンスティエーション (transubstantiation) の一種です。「太陽の全貌が見えた時に、祭火の中にヴァルウナの顔が見える」、こういう構造になっています。そのように考えますと、実は、祭火の中にいろいろなものや姿を見るといふ観念はあちこちに見い出されます。今まで正しく訳されてこなかっただけで、例えば、「荒々しいルドラの姿をしたアグニ」などという箇所は結構ありますが、同様に解釈することができます。祭火の中にいろいろな姿を見る。そもそも火というものは無数のマトリックスから成り立っていると言えるわけですから、自分の好きなものが見えるわけです。柴燈護摩というのは、これを使ったテクニクだと思います。「龍が見えた」「観音様が降りてきた」、これには一種の共同幻想が多少必要ですが、本当に見たいものを火の中に見ることができなのです。そうしたメカニズムに立った観念を詩人は言っているわけです。

「太陽光が岩の中にあるとき、暗闇が、すると、守護者である」

「守護者」というのは文字通り訳したものです。実際には支配者、管轄している者と考えられま

す。

「彼はその時、私を偉観（恐ろしい姿）へと、見るために、どうしても連れて行ってほしい」要するに「夜の太陽を私は見たい」と言っているわけですが、これは回想シーンです。「願望」とか「意志」、「未来」といった話し手の態度表明を表す動詞語形には過去形がありませんので、「過去」という事柄は枠組みの中で示すほかありません。これに類することは仏典の中でも重要な役割を演じます。仏典では、一度過去の副詞か何かによって枠組みが設定されると、後は現在形による表現が続きます。それらは全て過去のことを言っていることになります。そういう語法上の問題があります。如是我聞（によぜがもん）の話もそうですが、これはパリ語と後の經典との間に相違があり、違ったところで文を切り、そのために副詞が付け加えられたりと面白い現象があるのですが、時間を取られますので省きます。私ははつきりと指摘したことがあるのですが、誰も引用してくれないようです。

過去の回想ということは、「乗せたのだ」という、第四歌の一行目にある確認のためのアオリストという語形によって示されています。「夜の太陽を見に、連れて行ってほしい」と昔のことを回想する。「ヴァルウナ（という）神様と二人で私たちは船に乗り込むであろう」、「これも回想です。

「船に乗って海の中央へと進むとき、私たちが水たちの背の上を通って、動いていくであろうとき、進んでいくであろうとき、私たちはぶらんこの上で揺らしあうであろう、美しく輝くために」

「美しく輝くために」というのは、自慢、わたしたちでしたら「ほら、どうだ」と自慢をするような場面に用いられる表現です。「ぶらんこを揺らしあう」。太陽がぶらんこを重ねられていて、ぶらんこの勢いで毎朝太陽が昇っている。実はそうやって見てみますと、『リグヴェーダ』第VIII巻、ヴァスィシュタというのは the best man 「最上の男」という意味ですが、ヴァスィシュタ家の歌の中心は毎日の太陽を正しく昇らせることにあります。レジメ注(3)をご覧ください。

VII 80.1に「靈感のあるヴァスィシュタ家の人たちは、曙に対して、歓迎の讃歌を伴って[今]最初に目覚めた」とあります。部族の人々は皆寝ているけれど、自分は太陽が昇る前に、コプトの修道院のお坊さんみたいに、先に目覚めて…。他の箇所により明瞭に見られますが、まず、祭火に薪をくべて燃え上がらせる。次ぎにマントラを唱える。すると太陽が昇る、『リグヴェーダ』ではこういう順番になっています。薪をくべることによる魔術は『アタルヴァヴェーダ』以来密教にも連綿とつながっています。実は薪をくべるという行為は、私はインドの「拜火教」の中心概念であると思いますが、祭式の専門家、同僚である東大の永ノ尾さんは、薪は供物ではないということを強調して、そこがヴェーダとヒンドゥー教の違うところだと指摘しています。しかし、薪をくべるところに元来は重点が置かれていた可能性があります。

ヴァスィシュタは望んだわけです。「夜の太陽を見せてほしい」と。私は太陽に関するマジシヤンになりたいと。そうすると、「ヴァスィシュタをヴァルウナは現に船に乗せた」ではないか。これは確認のアオリストでありまして、昔の事実、昔の個々の出来事を取り上げて、それを「そうだったね」という時に使う語形が用いられています。

「リシと成したのだ、働き優れたヴァルウナは、諸々の能力によつて」。

「諸々の能力によつて」と訳しましたが、マハス *mahas* 「偉大」という語、その複数形はおそらく「権力、権限」の意味だと今は思っています。彼の権限によつてリシと成してくれたのだと。

要するにマイスター制度です。その次に「讃歌を唱える者と成したのだ、(靈感)に震えるヴァルウナは、日々が良き昼間を持つことに關して」とありますが、靈感に震えるヴァルウナだから、君も震える能力が充分にある、ということをも認めて、彼の権限でヴァスィシユタをリシとして承認したものと理解できます。リシというのは普通「仙人、聖者」と訳される単語で、ルシですが、元々は「荒ぶれる者、荒れ狂う者」です。他にはヴィップラ「ガタガタ震える者」、カヴィ「見る者」と呼ばれますから、ほとんど興奮状態でものを見る人たちということになります。

ヴェーダ文献には「言葉を見る」とはつきり書いてあります。そうした言葉を見る祈り屋さんたちがリシです。「お前は本物の祈り屋さんだ」という認可状をヴァルウナがヴァスィシユタに与えたということになります。ところがそれには期限と領域とが限定されています。「日々が良き昼間を持つということに關して」お前は有能な震える力、興奮する能力を持っている。だから免許状をやるということになります。期限としては「諸々の昼がこれから続いていくであろうかぎり、諸々の曙が続いていくであろうかぎり」お前はリシだと。要するにこれはドイツのマイスターブリーフ (*Meisterbrief*) に当たります。親方のギルドというものがあって、新しく親方になるべき者が申請する。そうすると親方たちが審査して、合格するとマイスター、マスター、親方の証書をもらい、その証書がないと例えば肉屋さんを開店できないというわけです。必ずお店に



飾っております。日本でも最近この種の証書を店に飾ることが増えてまして、いろんな認可の資格、年限付きのもの、更新されたものが飾っております。その書き方にも興味深いものがあります。「日々が良き昼間を持つということに関して」。これは非常にぎこちない言い方です。普通の『リグヴェーダ』の語法ではありません。後の哲学書にはよくあるスタイルですが、厳密かつ生硬な表現。これらのことから、そうした制度が当時すでにあったということが分かります。思います。当時は文字には書き留めませんが、こういう認可の制度があったことが分かります。さらに、期限についての表現が心憎いですね。「ヴァスィシユタが正しく歌を唱えると太陽が昇る。太陽が昇り続ける限り…」と、こういうことになると思います。ですから、いわば「卵と鶏」の関係になっていて、「永遠に、能力のある限り」ということになると思います。ただし、曙というのは別の女神ですので、その点の関係がどうなのかは分かりません。また、ただ単に「毎朝、毎朝、ずっと」と言うだけかもしれません。

ところがこのヴァスィシユタは今、職を追われてしまっているわけです。実はこの背景には、『リグヴェーダ』第三巻を作ったヴィシユヴァーミトラという仙人と、第七巻を作ったヴァスィシユタという仙人との間に、スダースという部族長の祭官職を巡る抗争があったと言われています。私はそれを信じます。スダースという、後のアーリヤ諸部族がインド亜大陸に広がるきっかけを作った有力なバラタ族の一人が、このヴァスィシユタを祭官として、十王戦争、他の十人の部族長の連合軍とバルシユニー川（おそらく現在のラヴィ川）を巡って戦い、打ち負かします。ところがその時にヴァスィシユタが何かルール違反をしたとヴィシユヴァーミトラが訴えたとき

れます。ルール違反とは、魔術を用いたということです。言葉によって、「それが真理に適っているからそれが実現する」という以外のことをしてはいけないのです。魔術を使うのはルール違反で、それを咎められて部族を追われる。彼は職を失ったのです。ヴァスイシユタには「私は魔術を使っていない」という歌が三詩節残っています。それが後に伝統文法学で誓いと呪いを論ずる際によく取り上げられる有名な三歌です。

#### 【会場から質問】

ヴァルナは男の神様ですか？

男の神様です。

ヴァルナという神の正体は後で説明します。今はまず読んで見ましょう。すみません。辻直四郎という私もお世話になった先生がいるのですが、彼が遺した言葉がありまして、「梵語いろはのかたことまじり 懸けた命の五十年 生まれお江戸の日本橋 水に映るよ泣き笑い」。「梵語いろはの：」というこれですね。私たちの世界の苦しいところは、普通の言葉に訳してお話しをすることが難しいのです。ヴァルナといっても知らない国の昔の言葉ですから。

ヴァスイシユタは追われてしまいますが、また地位を回復したと言われています。『リグヴェーダ』で見る限り、復権したヴァスイシユタが当人なのか、それともその子孫なのか分かりませ

ん。皆同じ名で呼ばれています。第三巻の方にも第七巻の方にもお互い相手を意識した歌がいくつかありまして、おそらく現実にあつた話を背景にしていると思います。ここでは、追われた後の恨み言になっているわけです。

「私たち二人の、当時の仲間関係」

神様と祭司とは一緒に仕事をするわけです。仲間関係はどうなってしまったのだと。

「以前だったら狼なく」

「狼なく」というのは、「心配なく、危険なく」という意味です。

「連れだつていたもの」

一緒に行動していた、お互いに付き従っていた。以前だったら安心して一緒に仕事をしていたではないか。あの仲間関係はどうなってしまったんだ？

「高い建物へ、ヴァルウナよ、自ら決定する者よ」

「高い建物」というのは、インドのこの時代の語法では、建物自身が高いという意味にも取れますし、高い、つまり上の方にあるという意味にもとれます。これは区別できません。ここでは、高い上の方にあるという意味だと思います。

「ヴァルウナよ、自ら決定する者よ」

「自ら決定する」、部族の中で決定権を持っている人という意味です。

「千の扉をもつたおまえの家」

*mina* を「家」と訳しましたが、「御殿」と訳した方が良いでしょう。「計る」という動

詞』から作られた語です。普通、家は計測しないで造るようですが、大きな家は計算能力、ヴァルウナの特徴ですが、そうした特別な能力を用いて、計算設計して建てるわけで、大きなしつかりした建物、「御殿」くらいでよいかと思っています。

「御殿へ私は出かけた」

昔、私は君に専門家として認められて一緒に活動していたのに、あれはどうなってしまったのだと。この繰り返りに続けて、要するにそれを許してくれ、という歌が続きます。

「身内の仲間で」

これは面白い話題です。後で触れます。

「ヴァルウナよ、おまえの家へ」

「おまえの」は間違つて訳しているように思います。「自分の」だと思っています。原文には「部族に属する仲間」としかありません。たぶん「自分の部族に属する仲間」のことだと思っています。私が間違つたことをしたのではない。うちの仲間が間違つたかもしれない。自分の部族に属する仲間が間違つたのかもしれない。でも私ではない、と言っているものと理解できます。

「おまえの同僚として、おまえに対して罪過をなすであろうならば、私たちが罪ある者として、おまえに対して、おそるべき者よ、償わないでよいように。」

罪は自分のせいではない。それならば罪には問われない。そういう内容の法律条項があったことが推測されます。そのことは文法上の理由から確かめられます。レジメ注の(9)に少し書いておきました。基にあったのは、「他人によつて為された罪は償うにあたらな」という文章と

思われます。『アヴェスタ』という、イラン側のゾロアスター教徒の經典の古い部分からもこの文の一部に当たるものが回収されます。『リグヴェーダ』にはこれに当たる文がヴァスィシユタ家に二度、四家系に跨って計五箇所伝えられています。ところが、そのいずれもが文法的に破格で、「他人によつて為された罪は償うにあたらない」という不定詞を用いた文が存在したと仮定すると、綺麗に解決できます。これは私の先生のカール・ホフマンが発見したものです。願望を表現する動詞語形が禁止法に用いられるのは『リグヴェーダ』においてこの五箇所のみなのです。どうしてそのような文法的破格現象が起きたのかというと、おそらくインド・イラン共通時代に、既にこれに当たる短い不定詞を用いた法律条項が確立していて、それを詩の中に加工して取り入れた時に動詞語尾を付加したことによつて生じたものと説明できます。

「靈感に震える、ガタガタ震えるおまえは、讚美する者に、いつも庇護を授けよ。この堅固な定住地に定住しつつ、おまえに我々は願う。(願う内容は…)我々から、ヴァルウナは、罪人を縛る縄を解き放つてしまふがよい、これを私たちは願う。アディティの膝の上から支援を」(アディティはヴァルウナの母です)

「膝の上から、助けてもらいながら。おまえたち神々は、諸々の安寧によつて、常に我々を守つていよ。」

こういう文で終わります。「堅固な定住地」とありますが、これもヴァルウナという神の重要なアスペクトの一つです。ヴェーダ時代のアーリヤの人々は、理念世界では、通常移動していて定住地を持たないということになっています。ただし、三カ月間くらいと推定される定住生活、ク

シエーマとよびますが、これを交えて大麦を育て、その収穫が終わると次へ移動して行くという生活がもともあつたように思われます。『リグヴェーダ』の第四卷、最近私が訳した部分に、王の交代、インドラという移動期の神から定住期の神ヴァルウナへ、定住期の神から移動期の神へ、それと符合して、王の役割の交代が歌われているものがあります。定住期が終わると略奪行に出て行きます。それをヨーガとよびます。すなわちヴァルウナは定住生活にとつて重要な神なのです。定住生活三ヶ月、というのは私が勝手に言っているのです。大麦は多少小麦より短い期間で収穫でき、三ヶ月程度のようなのです。大麦はインド・ヨーロッパ祖語に遡る語彙で、『リグヴェーダ』に多く言及されますが、小麦は『リグヴェーダ』には米同様知られず、少し遅れて、借用語であることが明瞭な語形で現れます。小麦にもいろいろな品種がありまして、最近、地球研究で、昔の小麦の品種が現在でもインドの一部に栽培されていることが分かりました。京大に様々な小麦の種について各地のサンプルがあり、インド矮小麦という品種はエチオピアのそれに近く、三ヶ月で収穫できるそうです。今のパンを作る普通の小麦は四ヶ月から四ヶ月半かかります。短い期間に収穫できる作物でないと、遊牧生活者はいつ襲われるか分かりませんし、それが三ヶ月は最低必要らしく、大麦はおおむねその程度の期間で収穫できるそうです。それが一つ。それから、さらに重要な示唆は仏教で言うところの「雨安居」から得られます。彼らは現実にはインドの平原に進出しているわけです。そうしますと、雨季には定住生活をするしかないわけです。「雨安居」というのは、仏教で、雨の時期に教区の僧が一箇所に集まって共同生活をする。普段は「遊行」ですから、乞食生活をしながら、各地を彷徨うという理念になっています。

が、雨安居の時だけは、二ヶ月または三カ月間、在家者の支援を仰いで定住合宿をするわけです。この雨安居と重なるような定住生活が既にヴェエダに見られます。いわば、その雨安居の神がヴァルウナであるという風に理解できます。また、仏教僧は、往時のアーリヤ諸部族の理念世界を個人で体現しているともできます。

このような歌になっているのですが、『リグヴェエダ』は紀元前一二〇〇年頃に編集された訳で、それに先行するインド・ヨーロッパ語族の遺産にも少し触れたいと思います。一郷先生が先ほどおっしゃって下さいました「インド・ヨーロッパ語族」という概念については、ハンドアウト二ページ目の中央に、「インド・ヨーロッパ語族」という図を挙げておきました。これは非常に単純化した図です。単純化した図で考えた方が分かりやすいのですが、インド・ヨーロッパ祖語という、元々一つの言語があつて、その後、話し手が各地に拡大し、植民地を作つて順次進出していった。その進出先でそれぞれ独自の発展を遂げてこのような形で今日まで繋がっているとすることがあります。元をたどるといつ頃まで遡れるのか、というのは難しい問題ですが、ギンブタスという、アメリカの考古学界に指導的役割を果たしたリトニア出身の女性がいいます。その人の説では紀元前四五〇〇年以前におそらくボルガ、ドニエプル流域の、黒海から少し遡る辺りに、三万人程度のグループがあり、その人たちが馬に乗ることを始めたわけです。乗馬の発明によって放牧地が急激に拡大しました。その結果生産性が増し、人口、家畜が増大して各地に拡散した、というようなシナリオです。もちろん英語もドイツ語もフランス語も、皆これらボルガ、ドニエプル付近から出発した人たちの使っていた言葉がそれぞれ独自の発展を遂げた結果、今日の

姿となっているわけです。

インド・ヨーロッパ語族の話はここで終えますが、一つだけ興味深い事柄を見てみましょう。今読んだ歌に「身内の仲間でありながら」という表現がありますね。「身内の」はニツテヤという単語ですが、二ページの5に挙げました標準的なヴァルウナ讃歌に次の一節があります。讃歌全体については後で読んでいただければと思います。

「アリヤマンに属する同僚であれ、ヴァルウナよ、ミトラに属する同僚であれ、いつも一緒にの同僚であれ、兄弟であれ、部族の仲間であれ、ヴァルウナよ、うちの者でもよその者でも」

表現が似ていますね。似ているということは、つまり、こういう法律上のセンテンスが既にあったということを示唆します。その人とういう関係か、親族か、同じ家の中で生まれた別の家族の一員か、あるいは契約で遠征に行く時などの同僚か、それとも…。そのような法律条項の分類がなされていたということが分かります。そうでなければこのようにきれいに照応することはないでしょう。「うちの者でもよその者でも」という表現が注意を惹きます。原文は *veśāṃ vā nityaṃ varuṇāṃ vā* 「うちの二員でも、ヴァルウナよ、よその（二員）でも」です。「ニツテヤ」と「アラナ」とが対比されています。ニツテヤが「うちの」、アラナが「よその」です。それだけでは特にどうということもありますが、実は、みなさんの中にもご存じの方が多いと思います。が、カエサル、シーザーが書いた『ガリア戦記』という、ケルト人のところへ遠征に行った時の記録があります。その『ガリア戦記』の中にケルト人の部族名として「ニティオブログス」*Nitiobro-*



ges と「アッロプロゲス」Allobroges が挙げられています。この「ニティオ」と「アッロ」、これが「ニッテヤ」と「アラナ」にほぼ対応します。おそらく、既にインド・ヨーロッパ祖語の段階で、法律的に固まっていた、「内」、「外」を意味する単語と思われます。ニティオプロゲスというのは、「境界の内側にいる者たち」という意味です。それから、「境界線の向こう側、よその側にいる者たち」、それがアッロプロゲスです。allo と arant- とではサフィックス(接尾辞)の形に違いがありますが、おそらく同一の語彙に根ざしていると思われます。ローマ時代に言及されるケルトの民族名と、「うちの者でもよその者でも」という対概念に平行現象が見られることに注意してよいと思います。

## ヴァルウナとは何か

「ヴァルウナとは何か」、ヴァルウナの背景を少しお話したいと思います。そのためにはインドとイランの共通時代の神々の世界を押さえておく必要があります。普通インドでは「神」を *deva* とよびます。もともと「天に存する」という形容詞です。他に *asura* という語があります。私は「アスウラ」と「ウ」を入れます。普通は入れませんが、これがないとアスラ *asura* 「痛い、痛みを与える」という語と区別できなくなりますので、「アスウラ」と書くことにしています。意味は「首長」です。仏典の阿修羅のもとになったアスウラです。他の言語における対応語は、「おじいさん」、「大家長」という意味で用いられています。また現実には『アヴェスタ』で

は、人についてアスウラと言われることがあります、おそらく「部族長」の意味で。元の意味としては「首長」あたりがよいかと思えます。それとデーヴァ。おおまかに二つの神様のグループがあったと考えると分かりやすくなります。インドでは神様は皆「デーヴァ」になり、元々アスウラに属した神も「デーヴァ」と呼ばれます。アスウラの仲間には七神にまとめられますが、実際には六の神しかありません。六番目の神はその時の必要に応じて自由に入れ替わるように出来ていると思われる、合計七の神がアスウラと定式化されます。『アヴェスタ』は、ゾロアスターによる宗教改革の結果成立したゾロアスター教（マズダー教、拝火教）の教典ですので、これら七神の痕跡が見られません。それでも、「神聖なる不死の者たち」が、古い分類では7とされています。後に12、13などとも言われますが、7が古いようです。しかし、具体的な中身は6しかありません。同じ現象が見られますから、おそらくインド・イラン共通時代に遡る神のグループがあったものと推測されます。全て社会制度の神格化です。ヴァルウナは王権、ミトラは契約、アリヤマンは部族の慣習・制度、バガは分配、アンシャは個人の取り分、第七のダクシャはその人の部族の中で果たすべき能力です。インド・ヨーロッパ語族に本来特徴的な、朗らかな、攻撃的積極性を持った神々とは異なる、厳格な社会制度の神々がどうしてインド・イランの共通時代に現れたのかといえますと、結論だけ申し上げますと、バクトリア、マルギアーナ、現在のアフガニスタン、カザフスタン、トルクメニスタンの辺りにあった強大な定住民族、その支配権の中で、インドの部族もイランの部族も暮らさなければならなかった時期があったという事情が考えられます。そこで生きのびるためには支配的部族の制度というものを受け入れざるを得なかった。こ

の新しい社会制度の神格化は他のインド・ヨーロッパ語族には見られないものです。ロシア語にはバガに対応するボグ「神」がありますが、これはインド・イラン共通祖語段階またはイラン語からの借用語と考えられます。そのような先進文化の下で彼らが暮らした時に受け入れた神々です。この先進文化は「バクトリア・マルギアーナ考古複合」と普通よばれています。まだ全貌は解りませんが、今日普通に報告されているものは、紀元前二七〇〇年以降、紀元前二二〇〇年とか、二〇〇〇年くらいまでの段階のもので、広大な城塞都市があり、たとえば地球研の長田俊樹さんが撮ってきた写真を見せてくれましたが、羊と馬の、ほとんど羊と私にはらんですが、そうした墓だけで二kmに亘つてあるそうです。羊ということになりますと、『リグヴェーダ』に見られる「ブルーラヴァスとウルヴァシー」の話に結びつけられる興味深い問題があるのですが、今回は立ち入りません。バクトリア・マルギアーナ考古複合からの外圧ということに関してはさらに状況証拠が挙げられます。この社会制度の神々の母親はアデイティですが、「無拘束」という意味です。自由の女神。自由の女神がこれらの制度神を生んだことになっており、ヴァルウナ以下の神々は「アデイティの息子たち」アデイツヤと総称されます。イランでアデイティに対応するのがアナーヒターという女神と思われる。アナーヒターとは「結びつけられていない」という意味だからです。語の構成法は異なりますが、両語の意味するところは一致します。おそらく別の文化のある女神崇拜が背景にあり、その有力な女神をインド語とイラン語それぞれにおいて翻訳した直訳借用語に遡ると考えるのが一番近道だと思います。実のところ、バクトリア・マルギアーナ考古複合からは女神の像がいくつも発掘されていて、どうもそのあたり

に源があるように思われます。アナヒーターという語のこのような解釈は私の二〇〇〇年に出版された論文によるもので、それ以降の知識ですので、普通の概説書には書いてありません。概説書で困ることは、バクトリア・マルギアーナ考古複合こそが、インド・イラン共通時代の遺跡だと主張する者があることです。そのようなことはあり得ません。遊牧移動する部族には城塞都市は必要ありません。文化的生産や蓄積も嫌いです。焼き物も自分たちでは作りません。よそから買う(交換する)か取ってきます。戦車は全て人に作らせるわけです。彼らは文明というものがある意味蔑視しております。財産は牛、馬、羊、山羊、男たち、黄金などに限られ、携えるということこそそもそも理念に反する行為のようです。そのような部族があればどの規模の城塞都市を築くわけはありません。今、考古学は盛んで、特にアメリカ文化の有力者中心主義、プロジェクト主導があり、奇矯な説が出されると、各地に賛同者、クライアントが出、日本では競ってその輸入業に努める、とこういう世界ですので、概説書、一般書には気をつけてください。実情を知っている者には何ともしようもない説が一般の知識となつていることがあります。

インド・イラン共通時代の制度神の筆頭、アデーティの息子たちの中の長男がヴァルウナという神様で、語源的には明確ではありませんが、どう考えても「覆う」という単語に関わるでしょうから、「庇護の傘で覆う者」、庇護者だと思えます。そこでハンドアウトの五項目、『リグヴェーダ』の「水の誓い」というところに、標準的なヴァルウナ讃歌を挙げました。先程紹介しました非常に独自性の強い、ヴァスィシュタの個人的幻想世界を描いた讃歌は「オリジナルな讃歌」と言つてよいでしょう。それに対して∞は標準的なヴァルウナ讃歌です。どちらも最後

の二つの詩節は同じような歌になっています。◁から第3歌を見てみましょう。

「口を下に向けた水袋を、ヴァルウナは、天地に、空間に、流しかけたのだ。それによつて、あらゆる世界の、王は、大麦を雨が濡らすように、地面を広く濡らす。」

この「大麦を雨が濡らすように、地面を広く濡らす。」の部分は解釈が難しいですが。「口を下に向けた水袋を天地に流しかけた」の部分に注目してみましよう。普通に見ると「雨を降らせる」ということになりませんが、おそらく、エネルギー循環の思想が背後にあります。太陽光線という眼に見えない細い管が地上まで続いていて、それが昼間水を吸い上げて天上へ持つてゆく。夜になるとそれを地上に戻す。だから、第6歌にあるように、海はあふれることがないのです。水とは、厳密には、微細な、熱を帯びた光る水の粒子で、「マリーチ」とよばれます。マリーチは「摩利支天」という形で日本にまで伝わっていますが、摩利支天の元の意味は分からなくなつて、太陽神の一つとしか解されていないようです。『リグヴェーダ』では重要な、宇宙を循環している熱を帯びた水の粒子なのです。従つて、夜、水が地上に降りてくることを言っていると思うのですが、それだけでは分かりにくいかと思います。図をご覧ください。イタリヤから発掘されたミストラ教の祭壇の夜の図からとつたものです。夜の図というのは、トーチを下に掲げてるのが夜。ミストラ教の祭壇はどこでも同様ですが、左側がフランクフルトから出た祭壇の図像です。オリオン座のように思われますが、マントを翻した人（ミストラ）が短剣を牛の首に突き刺して血を流しています。左側にトーチを降ろした夜、右側にトーチを掲げた昼があります。（この両者はもともと宵の明星、明けの明星の神話から出発しており、『リグヴェーダ』のナーサツテヤと

アシシュヴィンに余韻を留めています。)右側のボノニアの祭壇の宵の明星の奥には月が出ていて、水瓶が逆さになって水が下に流れています。これこそが『リグヴェーダ』で歌われている内容を図に書いたものと言えるでしょう。これがイランからヨーロッパへ伝わったミスラ教の祭壇の中に画かれています。私としては非常に重要なことだと思います。夜の太陽をめぐる思索について触れる必要がありますが、ミスラ教について少し解説します。ミスラというのはアーディティヤ「アディティの息子たち」の中で、ヴァルウナと並んで二番目に挙げられる、「ヴァルウナ・ミトラ」のミトラ(Mitra ミットウラ)に当たります。ヴァルウナの方はゾロアスター教の宗教改革によって、アフラ・マズダーに変身していますから、普通の神々の姿として私たちが知っているものとしてはミスラ(Mitra)が一番の神です。ミスラは太陽神になっていますが、『リグヴェーダ』にヴァルウナと組で歌われる、「契約」を意味するミトラという神のイラン版が「ミスラ」です。イランでは子音の前でtが摩擦音θに変わるため「ミスラ」です。その崇拜がヨーロッパ中に広がりました。アフガニスタン、中央アジアにも広まっています。ヨーロッパに広がったのは何故かと言いますと、結論としては外人部隊を通じてだと思っています。そういうことは一般書にはあまり書かれませんが。どうしてかと言うと、西洋史をやる人は西洋史上の事実の展開に沿ったものを考える。中央アジア史の人は中央アジアに起きた現象を追う。もともと古いところの、基となったインド・イランの宗教から語るということは歴史学の範疇からはみ出しています。ただ、その大本と原理とが分かってみると理解が簡単になると私は思います。ペルシャ戦争と呼ばれるエーゲ海の覇権を巡る、アテネを中心としたギリシャの勢力と、アケメネス朝ペルシャとの

戦争は、実際にはお雇い部隊のイラン系の人々同士が戦っているという面が強いわけです。どちらかに雇われて。ローマ時代の傭兵にもイラン系、特にギリシャ語でスキュタイとよばれるサカ族の人たちが最後まで移動生活を守っていたために武闘派的性格が強く残り重用されていたようです。よそからものを略奪することもある攻撃的な遊牧部族の方が定住生活者よりも戦闘に向いています。そのような人たちがお互いに陣営を隔てて戦った。そのような事情がはつきり描かれている古いレリーフがあります。それはエジプトを襲った海の民に対する、紀元前一二〇〇年前後と思いますが、ラムセス三世の戦勝記念碑です。結局エジプト軍が勝利します。エジプトの衣装を着て弓を射ているのはエジプト人だと分かります。その他のあちこちで戦っている戦士たちには二通りの髪型があり、しかも両軍に共通して見られます。敵も見方も同じ格好をしています。髪型は部族を示す通行手形です。少し違う点もあります。エジプト側には、髪型が同じなのに、その上に太陽の飾りをつけている者たちがあります。その冠さえ取ってしまえばお互い同じです。どう見てもインド・ヨーロッパ系の部族が中心になっていると思われます。この場合、イラン系とは言えませんが、紀元前一三世紀にも武闘派は強かったのです。お雇い部隊としてヨーロッパに雇われていた人たちは契約（ミトラ、ミスラ）によって雇われており、契約によって身を護っていたものと思われます。彼らの神は「契約」を原義とするミスラなのです。明日をも知れない生活をし、現地の下級武士たちを巻き込んで秘密結社のような儀式をやっていた。その儀式場が、例えばローマですとキリスト教会の地下に今でも多く遺っています。Iの左側に掲げた祭壇はドイツのものです。ほとんどこれと同じ祭壇が正面の壁に飾っており、両壁際と中央に石

のベンチがありまして、ワインを回し飲みし、秘密結社風の儀式をやり、兄弟仁義のような階級制度があつて、昇進してゆくというような、そういう団体だったようです。地下の岩屋で何をしているのか。これは岩屋に落ちた太陽、岩屋に閉じこもつて、夜沈んだ太陽をまた復活させようという儀式かと思ひます。牛か水牛から流れ出る血と同定して、ワインを飲み合つていたのではないのでしょうか。そうした下級武士、外人部隊の秘密結社の宗教、それがミ斯拉教で、夜の太陽を巡る儀礼と思われまふ。夜の太陽を巡る儀礼というのは、実は、広く広がつていて、この真宗文化研究所にも繋がる場所がありはしないかと思ひで、ハンドアウトの最後に「少年と戦車の歌」を挙げておきました。ミ斯拉教の祭壇がどちらを向き、入り口がどちらを向っているか、確認の必要があります。

二番目(Ⅱ)のギンテルトと書いた図をご覧下さい。左側に螺旋があり、右側にこれと繋がった螺旋があり、男の人が独特な姿をしています。左側にソリのようなもの、右側にキツネのように見える動物が描かれています。まるでキツネをソリに乗せようかとしているようにも見えますが、他の図と比べると、これは船と馬であることが分かります。上手く描かれていると思いますが、真ん中の男の人は乗り移る姿をとっています。すなわち、夜の太陽を乗せて夜を渡つてきた船から下りて、昼間これから馬に乗つて天を駆けようというシーンを表しています。右側に、下を向いている子どもと上を向いている子どもがいます。これもどうしてかは分かりませんが、子どもに見えますね。下を向いている方が夜の太陽を導いてきた宵の明星で、上を向いている方がこれから太陽を導く明けの明星だと示唆されるのは、すぐ下の剃刀に彫られた図からです。夜



の太陽光を運ぶ船があります。その前に雁が足を上に向けていますね。そのことから逆さま向いているのが夜の太陽を導く者であると理解されます。おそらくひっくり返って船を運ぶのでしょう。これには夜の天を逆さになって行くという解釈と、エジプトの神話に描かれているように地下の水脈を通るという解釈が可能です。そういうシーンが描かれていて、「宵の明星」と「明けの明星」とはつきり言っていましたでしたが、どうしてかということは、実は『リグヴェーダ』に、アシユヴィンとナーサツテヤという一組の神があり、その讃歌の吟味と、ギリシャ神話、ラトヴィア民謡との対照、ヨーロッパの一連の図像群から確かめられます。また「梵語いろはのかたことまじり」で申し訳ないのですが、アシユヴィン讃歌はかなりの数残っています。古い単語を多く遺しており、インド・ヨーロッパ語族の遺産を引き継ぐ点が大きいように思えます。彼らのマジックは本当に不思議な力、超能力という単語で、ヴァルウナが用いる計算能力とは異なります。ヴァルウナは決して超能力を使うのではなく、「 $1+1=2$ 」という理屈を用います。ヴァルウナのそのような能力はマヤー、つまり「計算能力」です。ところがアシユヴィンが医療などに用いるのは不可思議な力で、ダンサスと言ひ、彼ら自身はダスラ「超能力をもつ」とよばれます。つまり、異なる文化層に属する神たちです。アシユヴィン「馬の専門家」という方が昼の太陽を乗せた戦車の馬(アシユヴァ)を牽く神であることは明かで、ナーサテツテヤというのは「無事の帰還を司る」という意味ですから、太陽を無事東の岸に送り届ける宵の明星です。医療の神としての金星、それがはつきり分かるのは仏典です。宵の明星と明けの明星とはもちろん同じ天体ですから、両方が並んで出るわけではないのです。ところが非常に古くから一組に組み合わせ

され、二神一組になっています。実は一方は天の子で、一方は地上の王の子だということに、ギリシャの文献でも、『リグヴェーダ』でもなっています。もとは別でした。ギリシャでは「天の息子たち」と呼ばれ、『リグヴェーダ』では「天の孫たち」と呼ばれています。紀元後一七世紀くらいのラトビアの歌に、『リグヴェーダ』とギリシャの文献の内容にそっくりのものがありません。そこでは「天の息子たち」と呼ばれています。内容は、太陽の娘との結婚を巡って月と張り合う話です。金星の運行を例えばコンピュータで見ると分かりますが、月との位置関係が複雑で面白い動きをします。そのことと関係があるでしょう。同じ金星ですから、同時に現れることのない宵の明星と明けの明星とは別の話を持っていたのですが、相当古い段階で二神一組の神話が出来上がっていました。ギリシャではカストールとポルックスという両金星です、それがジエミニという形で双子座に置き換えられ、二人一組になります。その二人一組を描いた剃刀が出土しています。

# 図の説明

弾けた太陽光が船に乗り、その中央に男の子が二人立って、両手を広げて腕を左右に開いている。二人の頭上には光線が描かれています。そのようなユートラント出土の青銅製剃刀を紹介したかったのですが (Günter, *Der arische Weltkönig und Heiland*, 1923, p.273 より) 、ハンドアウトに入っておりませんでした。(ここでは正しく差し替えてあります。)

この種の剃刀はデーンマークとかハンブルクの北のドイツ沿岸地帯から多量に出ています。青銅で作られた剃刀に彫られた夜の太陽を運ぶ船の図です。どうしてこのようなものが描かれているのかということは考えてみる必要があります。まず、剃刀は重要なものだったのです。インド・ヨーロッパ祖語に遡る道具名はほとんどありません。例えばある言語の道具名と対応する同じ単語が別の言語にあっても、道具名としてではなく、別の使われ方をされています。剃刀は各言語にあります。サンスクリットではクシュラ、ギリシャではクスウロンです。私の先生がある時、「これはインド・ヨーロッパ祖語に遡る殆ど唯一の文明の利器だ。何でそんなに剃刀が重要だったか分かるか」と言うのです。「どうしてですか」と聞きましたら、——先生は何か気が付くと私のところへ来て一節話していくのですが——「インド・ヨーロッパ語族の人はね、きみ、毛深かったのだよ」と言つてにやりとされました。つまり話には奥がありまして、民会というものがあり、民会でものごとを決定する、個人主義、民主主義というものが既にあったのだということです。彼らは、といつても家長クラスの男子でしょうが、全員で集まって取り決めをしていた。その時に民会に参加できる資格は何かと言うと、髪を短くし、鬚を剃って顔を現し個人を証明することだったのです。だから剃刀こそがパスポートなのだと。そうした定期的に髪を切り、鬚を剃るという風習はインドではどこに見られるでしょうか。それは、新月祭、満月祭という毎月のお祭りの前日に祭主が髪を切り、鬚を剃るというところに見られます。祭場には五火があります。「家長の火、南の調理の火、献供の火、集会所の火、客を泊める宿泊施設の火」。客を泊め

るとするのは、何かを催す時にホテルはありませんから、同じ部族や契約関係にある部族の仲間を宿泊させる施設があったということです。集会にも招かれて出席することがあったのかもしれない。サバー「集会」というのがそれこそ民会です。私の推測では、新月の夜の前日と満月の夜の前日とにかつて民会があり、二週間に一度鬚を剃って集まる風習が翌日の新月祭、満月祭というヴェーダ基本祭式の構造に組み込まれて残っているのではないかとことです。前日の行事は祭りの準備と祭主夫妻の規律(ウラタ)に従う生活で、ウバヴァサタ(原義は「控えて、または、備えて夜を過ごすこと」)<sup>(2)</sup>の日とよばれます。仏教に取り入れられた形がパーリ語の「ウボーサタ(布薩)」です。北欧の剃刀はそこまでずつと続いている、長い因縁を持つものなのだと、今私はホフマンのことを思い出して、このように結びつけています。何故剃刀が多数出土するのか、要するに埋葬品です。これを持っていないと、死後、民会に出席できないという、死後への備えかと思えます。阪本(後藤)純子が明らかにしたカルマン(業)理論の基となった「祭式と布施の効力」を巡る議論の一部を想起させるところがあります。<sup>(3)</sup>その点を少し頭に置いておいて戴けると、最後の『リグヴェーダ』の締めくくりに繋がるかと思えます。

四番目に挙げました二重螺旋の図をご覧ください。ギンブタスというインド・ヨーロッパ語族の考古学を一人、というか彼女の率いるチームをもって開拓した人の著作から採りました。私は彼女の説の大筋を信じています。今の考古学者はほとんど「彼女の説は全て小説だ」と言います。しかし、それは個々のデータ、事実についてで、彼女が描いたストーリーそのものは私は信じられるように思います。挙げる個々の証拠は殆ど全て誤りだが、大筋は争いようがない、そういう

ことは何か新しい理論を打ち出した人の著作にはよくあることです。これもその例だと思っています。私はギンブタスという人の書いた小説、それは「使える小説」だと思っています。左側にいるのが北イタリア出土の石板です。洞穴の入り口のようなところに眼鏡状の二つの螺旋が描かれています。右側も北イタリアの山の中から出土したものです。右に二重螺旋がキレイに二つ置かれています。この二重螺旋と同じ形状のものがスイスから出ています。左下に挙げたもので、石器時代の遺跡から出土したスイス最古の金属製品だそうです。紀元前四〇〇〇年から三五〇〇年頃のものとなされ、中央ヨーロッパ東部からの輸入品と考古学者は言っています。この実物と先の石板に画かれたものはピッタリ合います。時代的にも大変興味深く思われます。これも今日は詳説できませんが、私の勝手な独壇場なのですが、ユーラシアには鍛冶職人のネットワークが昔からあり、それに属する遺物の可能性が高いように思われます。そのネットワークに属する各地から、点々と同じような意匠の石板が出ております。鍛冶職人が自分の生産品を前にぶら下げている石像が中心です。もっと飛びますと、現在のシベリアからの報告を聞いて驚いたのですが、鍛冶職人は同時にシャーマンで、革の長いコートを着て、その上に自分の作っている多種多様な金属製品一式をカタログのようにぶら下げているのです。古いこの時代の石板、石像は、まだ少数の製品をもつだけで、ハンマー、剣などが見られます。南フランス、北イタリアの山岳地帯、トランシルバニア、ユーゴスラビア、ルーマニア、ウクライナ、黒海の北岸、東へ行つてコーカサス、イランの西部、各地に同じような意匠の石板ないし石像が出ています。時代があとになればなるほど製品の数が増します。そうしたことから、鍛冶職人、鉱山労働者のネットワークの存

在が推定されます。担い手は明らかにインド・ヨーロッパ語族ではありません。インド・ヨーロッパ語族の人々はそうしためんどうな職人仕事を軽蔑していたようです。そうした山の人の中にアナトリア、つまり現在のトルコの山岳地帯にいた部族があり、当然ネットワークの鎖をたどればアナトリア高原、トルコの山中を通りますから、彼らが、たぶん隕石から鉄鋼を作り出すことに成功した。その部族を独占的に支配したのが紀元前二千年紀にアナトリア(今のトルコ)に進出したヒッタイト王国の人たちと考えられます。彼らはインド・ヨーロッパ語族の人たちです。そこへ紀元前一三世紀末に「海の民」という、これまたインド・ヨーロッパ語族の荒くれ者を中心としていたであろう攻撃的な連中が出てきて潰す。その結果鉄、鉄鋼生産がヒッタイト王国の独占から解放され、世界中に一気に広がる訳です。このスイスからの出土品は中央ヨーロッパ東部からの輸入品とされていますが、北イタリアの可能性も考えられるのではないのでしょうか。このように、石板に描かれているものほとんど実物が出土しています。

次の三ページ上はトロイアの宝物です。二重螺旋という意匠には金属細工の然らしめるところがあると思います。例えば昔私たちの世代ですと、針金細工で自転車や飾りを作って道に並べ、ヨーロッパをさすう人がいましたが、針金細工ではこのような形のものがごく自然にできるように思えます。しかし、それだけではないというのが私の考えで、夜の太陽が大きな役割を果たしていた部分があるのではないかと思っております。先にスウェーデンの岩絵と『リグヴェーダ』のアシュヴィン双神讃歌に触れました。これも私が昔突きとめたことですが、アシュヴィンの移動方法には船がある、戦車がある。馬が引っぱる、鳥が導く、海の上を通る、空を駆ける：

いろいろなバージョンがあります。それらを組み合わせると二つの、夜、太陽光（厳密にいうと「太陽」ではなくて「太陽光」です。弾け飛んだ物質としての太陽光）を、船に回収して東の岸まで連れて行く、その船を鳥が導いていくという神話と、馬に乗って東から西へ空を駆けるといふ二つの神話を合体させたものだと考えるとよく解ります。インドでは乗馬ではなく、太陽が戦車に乗り、それを馬たちが牽きます。その両者、夜の太陽と昼の太陽とを主導しているのがナーサッテヤとアシュヴィンとです。『リグヴェーダ』に語られるアシュヴィンが乗るとされる戦車は不思議なことに三つの要素から成っていて、まだ詳しく研究したことはないのですが。車軸が三つ、轆も三本、座が三つと不思議なことが書いてあります。ヨーロッパから出土した、各種の太陽を乗せた戦車、車輪などにも三つの構成要素から成るものが多いことに驚かされます。また、鳥が船先に留まっていたり、車の先端が鳥の形をしているものがあります。ナーサッテヤが夜の太陽を船に乗せて鳥に導かれて戻る表象と、馬を操るアシュヴィンの三つの構成要素からなる戦車によって昼の太陽を運ぶ神話とが、インド・ヨーロッパ祖語の段階ですでに合成されており、それ故、このような図像がヨーロッパにもあると考えられます。従って、これこそインド・ヨーロッパ語族の遺産かというところまで考えてしまうのが、次の日本の装飾古墳です。

羽山古墳という山形県にある装飾古墳、これには繋いだ二重螺旋が描かれており、先のギンブタスの書にあるハンドアウト二ページ中央左側の螺旋図とよく似ています。バルト海、北海沿岸地方出土の剃刀に描かれている、船に乗せて運ぶ弾けた太陽光に当たるものは日本の装飾古墳に多く描かれている蕨文様を想起させます。馬と船というのはそもそも共通するモチーフです。た

たとえば竹原古墳、私も大学生時代に見に行ったことがあります。珍塚古墳も見ました。

「お配りした図の説明の中では、竹原古墳と珍塚古墳が取り違えて書いてありました。」

あの頃は装飾古墳など誰も注目しませんでしたので、教育委員会の人喜んでくれて「よく来てくれましたね、これが鍵です。これ照明装置です。入ったところの右側にコンセントがありますから自分で見てきてください」と言われて歓迎されました。長いコードを持って一人で見に行きました。保全上大変危険でした。「あなた良い時に来ましたね。先週都立大の先生が来て、すっかり塗り直して行きましたからよく見えます」といわれて驚きました。竹原古墳をよく見ると、馬の上に描かれている大きな龍とも説明される馬のような動物の頭上に弧の形をしたものが描かれています。船とも月とも説明されていますが、実物は鳥のようで、足と頭が彫り込まれた線で見えます。後から加えられたのかも知れませんが、そちらの方がもとなのかも知れません。考古物というものにも注意が要ります。エーゲ海のいろいろな壁画遺産も、アールヌーボーの人が泊まり込みで描いた復元図が多いのですから。もう一つ注目されるのは、六ページの右上の図を見ますと、うきは市塚花塚古墳というのがあります。そこに蕨文様が二重になったものが見られます。左側の写真はオーストリアから出土したのですが、同じような二重蕨文が四方に書かれています。このように、ヨーロッパと日本とに共通する意匠が多数発見されます。日本の学者は照葉樹林帯という道具をよく用います。ある専門家は照葉樹林帯を通じて昔のヨーロッパか地中海地方から日本に伝来したものだと思っています。その間何百年、何千年の隔たりがあるのですが、ヨーロッパ起源と解説しています。私にはどうもそうは思われません。夜の太陽を巡る普遍



的な何かの現象を描き留めてるように思われます。それでは、何故「夜の太陽」なのか。そこでしめくくり、ハンドアウトの四ページ目、『リグヴェーダ』の「少年と戦車」の歌を見て終わりにしましょう。

## 「少年と戦車」

### 「ヤマ」

ヤマというのは双子の一方という意味ですが、後の「閻魔」様です。イランでは「イマ」、正確に言うと、ゾロアスターは「イエマ」と言い、それに続くゾロアスター教の信者たちの文献では「イマ」となっています。現在では「イム」です。「イムラー」というのはインドのヤマ・ラージャー「王ヤマ」に当たる呼称が今に至った形です。ヤマは閻魔ですが、人間の死者第一号として死者の王国の王、いわば牢名主となった側面が強調されます。

「ヤマが神々と共に飲んでいる、よく葉の繁った木の下、そこで我々の部族の長、父は昔の人々を尋ね探っている。昔の人々を訪ね探り、悪い様で惨くも歩いているのを、嫌悪感を覚えていつ私は見つめる。だが突然、父を恋しく思う気持ちが生じた。」

非常に短い単語で上手く書かれています。要するに、当時は部族長だけが人間として問題にされていました。死者は祖先のところへ行きます。夏の放牧場のような、日本の浄土平、そこで永遠に幸せな生活を、部族の昔の祖先たちと一緒にする、そのような観念がもととありました。そ

こへ、この詩人は強烈な一撃を加えます。

「少年よ、おまえが思考によつて造つた、車輪の無い新しい戦車」

お前が頭の中で今造つた思考というものの、それには車輪がついていないが、

「一本の轆をもつてあらゆる方向へ向かう。お前はそれを見ることはないが、それに乗っているのだよ。」

それはお前が頭の中でその都度こしらえあげるもので、現実ではないと言っているわけです。さらに上手いのは、懸詞になっているのです。「計画」にあたる単語マニーシャーを想定して、上手く分解し、「思考」マンまたはマナスの「轆」イーシャーと懸けています。「思考」がどのような作業をしているかと言うと、轆は一本しかない、つまりその都度、一つの対象しか考えられないが、あらゆる方向へ向かう、つまり、何でも考えることができる。これをこの詩人はその分析力によつて見事に捕えて、上手く表現しています。それがこの詩人の力量です。死んだら部族の祖先が集うヤマの楽園に行くなんてことはお前の頭の中の出来事に過ぎないのだよと。

「少年よ、おまえが靈感ある詩人たちのもとから回転させはじめた戦車、それを追つて、サーマンは回転しはじめた。ここから共に舟に乗せられて」

「ここから共に舟に乗せられて」の解釈には少し難しいところがありますが、多義的ですが、要するに葬式のお坊さんたちがサーマンを歌う。葬式とサーマンとは関係しているようです。サーマンとは声明のようなもので、私たちが今日読んでいるこの『リグヴェーダ』の歌に節を付けて歌うものです。四、五人で輪唱したり、合唱したりするものですが、そのテキストは今

日まで遺っています。葬式の時にそういう歌を歌うということが分かります。そこから舟に乗っていく。装飾古墳の馬と船、馬が船に乗っている絵を想起させます。皆はそう思っています。しかし、

「誰が少年をつくったのか？ その戦車というもの、我々の思考能力というものを誰がそもそもつくったのだ。一体誰が今日それを我々に言うことができよう」

そんなことを聞いても分からないだろう。それを詩人は上手く次へ繋げます。

「乳母がどうなってしまったのか」

というところに方向を変えるわけです。我々は今誰も何も言えない、乳母がどうなってしまったかなどということは。少年の死んだ乳母のことを言いたかったわけです。

「乳母がそうなったように、そこに先端（てっぺん）が生じた。東側に底は展げられた。西側に出口が造られた。これが神々の御殿とよばれる、ヤマの居場所なのだ。ここに葦の笛は吹かれ、この者は歌声によって飾られる」

墓場の周りで人々が歌を歌い笛を吹いている。これが死んだ後の世界にすぎない。お前が思っているような死後の世界なんてない、あるのは墓だけなのだ、ということを歌っています。その墓がどうなっているのか。

「西側に出口がつけられ、東側に底が張られている。てっぺんに墓標か何かが立っている」

例えば、ヨーロッパの教会はすべて西から入って東向きに祭壇があって閉じられています。エルサレムの方を向いていると説明されますが、こじつけで、おそらく昔からそういうものだったの

でしょう。西から出入りする。つまり沈む太陽の方向へ墓あるいは教会から出ていくわけで、東は拝む方角です。しかも素直に読むと仏塔の格好をしています。仏塔の研究は杉本卓洲という東北大の大先輩が、大変重要な宝庫のように情報の詰まった博士論文を書いて出版しました。彼は仏塔はインドで後に生じたものだと言論していますが、今日ではインド・イランの共通時代の遺産だと考える人が多いと思います。一つにはこの『リグヴェーダ』の箇所が正しく翻訳されていないことに理由があります。より重要なのは、ユーラシアの草原地帯に見られるイラン系、それもサカ族の墓に、現実には車輪をふせた上に土饅頭を築き、地下に夫婦を埋めたものが見られます。甚だしい場合には馬と武人を串刺しにして周りを囲むように立ててあります。そのような墓が複数出土しています。ナーガールジュナコンダの仏塔は石か何かで車輪の格好に基盤を組み立ててからその上に土が盛ってあるそうです。同じ構造を思わせますので、おそらくインド・イランの共通時代に遡る墳墓の作り方に車輪を置いて土を盛る、というものがあつたのではないのでしょうか。あるいは、そもそも仏塔がイラン系のサカ族（インドではシャカとよばれた）の遺風を継ぐものとも考えられます。その上に墓標が尖塔を立てるわけです。その墓標の高さは、ヴェーダ学派の葬送文献には、バラモンなら口の高さ、バラモンは口で生活していますから。クシヤトリアだったら力で生活していますから上腕の高さ、ヴァイシヤならば腿でしたか、そういう規定があります。なぜ西側に出口があるのか。沈む太陽は必ず甦る。沈む太陽を甦らせる儀礼が死者に対する儀礼の背景にあつたのだと思われます。しかも、世界中に。ある部分はインド・ヨーロッパ語族の段階、ある要素はインド・イラン共通時代に確立したもので、またある部分は日

本の装飾古墳にも見るように、何といたらよいでしょうか、いつでもどこでも起こりうる普遍的な表象であるように思えます。今後の研究が待たれます。普段苦勞して研究しておりますので「これは印欧語族だ」と言いたくはなりませんが、そうも言えないところが大きいように思います。「インド・ヨーロッパ語族だ」と言いたくなるような、はつきり形成されたものがあることも事実でしょう。このような事柄、現象を普段から興味を持って見ていく必要があると思います、西方を望みながら……。分かりにくかったと思います。申し訳ありません。

## 質疑応答

A…『リグヴェーダ』は歌わないのです。歌はサーマンといい、別の歌を歌う専門祭司たちが、主に『リグヴェーダ』の歌を歌詞として、それに節をつけて歌います。『リグヴェーダ』自体は普通の言い方で読む、あるいは、唱えるもののようなのです。節を付けて歌うというのはまた別の：そういうものがったということは確かです。ただユカラの場合は、たぶん物語、叙事詩のようになっています。ところが『リグヴェーダ』は物語を語ってはいません。いわば神学者たちの言葉による魔術の道具で、そこに神話が引かれることはあっても、神話を語っているのではないのです。その証拠というとおかしいですけど、これも動詞研究の結果ですが、『リグヴェーダ』の中心となる動詞の表現法は、時間を超えた事柄を語る動詞形で表現されているのです。ですから、「こういうことをしました」という報告ではなく、「○○をする」と、皆知っているはずの

共通体験、普遍的事実などの中身に「言及」するスタイルを中心に書かれています。それに対して、『ホメーロス』や『マハーバーラタ』などの場合には、相手が知らないことを前提として「こういうことがあったのだよ」という語りになっています。過去形で語られる文学です。『リグヴェーダ』という文学は過去形ではなく、過去などの限定のない、内容だけを伝える文体を中心としています。そこに時々、神様に対して命令したり、願望を入れてみたり……となっています。無論引かれる会話の中には普通の語法が見られます。これはティームという先生がきれいに述べていますが、文学の姿として『ホメーロス』と『リグヴェーダ』とは全く違うものだと。

歌に合わせて歌うものではなくて、言葉だけを詠み上げるものだったのでしょうか、元来。『リグヴェーダ』の本文そのものには、音楽的な要素を探れるような痕跡は今のところありません。

A…『リグヴェーダ』第十巻の「巨人解体の歌」というところで初めて、祭司階級、武士階級、生産者階級、部族の人に奉仕するための階級、この四つが出て来ます。どう見ても、時代、社会が既にそうなっていて、それを謂わば憲法に入れたために『リグヴェーダ』に加工して歌い入れたという風に私は感じます。おそらくアーリヤの諸部族は、他の所では生きられなくなつて、しかたなく食うや食わずで山間部に入り込んだ。そうしたら結果としてインダスの上流に出た、というのが真相だと思います。インダス川の上流に進出しても、部族全体が減びていてもおかしくはない状況にあったと思われる。その時に、一致協力して、組織の力も大きいですが、全員が集まって、もともと喧嘩が好きな人たちではありますが、異部族に対して一致して自分たちの

権益を守り、他方、『リグヴェーダ』や後に続く祭式文献を見れば良く分かりますが、とにかく子孫を増やすということに必死になっています。それからもう一つ、必ずしも血の区別によらない部分もあるようです。アーリヤとしての生活習慣をとれば、アーリヤであり、それさえ守られれば、極端な場合モンゴロイドでもアーリヤです。アーリヤという単語の意味は、普通「高貴な」と紹介されることが多いと思いますが、そういう意味ではありません。「アーリヤ」というのはそもそも「部族社会の慣習に則った」という意味です。ですから、自分たちの生活習慣に適合させられれば、誰でも自分たちの仲間になれたわけです。それは遊牧社会では割と常識的なことだと聞きましたけれど、そうでなければ生きのびていけなかったかと思います。そういう形でやつと生きのび、人口を爆発的に増やし、他の異部族の人をその文化の中にどんどん取り入れながら、だからアーリヤサツテヤ「(四) 聖諦」ですよ。同じ文化を取り入れた者は同じ人権のある者として認めたわけです。

Q…ウパニシャッドの哲人や、後のヒンドゥー教にまで影響を与えたのですね。

A…ウパニシャッドの哲学は、ヴェーダ祭式を職業としていた祭司たちの、後の世代の人たちの改革によるものです。この人たちが変えたものです。それが職業だったわけですから彼らの。その中から、ウパニシャッドの学者たちは祭式から離陸して、抽象的な普遍的な思考を抜き出して議論をするというのを始めました。もちろん背景には、社会の変革、進出した地域差、大都市の成立と人口の流入、部族社会からの開放…そうした社会的歴史的背景があると思います。その

中から、祭官階級出身でない思想家、学者も現れ、祭官階級と並んで新しい需要に応じていたのでしょう。そうした背景の進展の中で社会的に成立したもので、イデオロギーが先というよりは、結果としてヒンドゥー教になったのではないかと。これは生物としての戦略の最終的な、他に取りようがなかった生き方だというのが、私の運命論的、受け身な解釈です。

A…ハーヴァード大学のヴィッツェルという、日本でもおなじみのインド学者神話学者がいますが、天の岩戸と『リグヴェーダ』の曙の讃歌について長大な論文を書いています。インターネットで見られるはずですが。彼は出版しないでインターネットで発表することが多いのです。英語が主です。奥さんは日本人で、ドイツで日本学を学んでいたときの先生ですし、家では日本語で過ごしていると言っていますので、日本の神話をよく知っています。天の岩戸と同じ話だと彼は言っています。

Q…いわゆる印欧語学、歴史言語学、神話学、あるいはちょっと古いところでデュメジルとか、こうしたものを全部身につけておかないと、今日の先生の講演はかなり難しいと僕は感じただんですけど、今、先生はある先生についてクリティシシュな感じで言われていましたけど、言語学、民族学、神話学、この協力体制というのはどう感じるんですか。

A…私は考えた方が逆だと思うのです。『リグヴェーダ』のこの行を理解するために必要なことを全て動員するということであって、何かを学んでからテキストを読んでも、もうそれは見えま



せん。私は「少年と戦車」はよくできていると思いますが、私たちは自分の見たいものしか見られないんですよ。私たちは気が付いていること以外発見できないのです。その都度、総動員して考えていくことであつて。ただ、こうだと決めこまない。ただし、我々の文化の中では単純に物事を組み立てることのできる決め込みの強い人が発言力を持ち、皆その人にお任せして生きようというのが社会の主流ですので、そこは気をつけなければいけません。それで諦めのつく人はそういう風に生きればいけれど、そうでなかったら、何か一つのことを理解するために、あれはどうだろう、これはどうだろうと、模索探索すべきです。ただ、文法です。文法はトレーニングしないととても身に付きません。身に付かない限り原文は読めません。だから一番大事なのは文法だと思っています。「付言…協力体制と言うことに正しく答えておりませんでした。例えば、大学や学会で、ということになりますと、現実には協力は難しいです。私の経験では、かなり異なった分野の人たちが参加するプロジェクトの場合には、隣接分野の人とも会話ができて、ある程度、成果と言うよりは頭の体操、耳学問に役立っているように思います。隣接分野の専門家とだけでプロジェクトを組んでもなかなか議論がしづらいという実感をもっています。より上位の座標面が必要なようです。どうしても隣接分野の成果は本に頼ることになります。耳学問の機会は貴重ですが、なかなか時間がとれないというのが現実でしょう。それよりも目の前の原典を「読む」と言うことになります。」



- (1) 注
- 後藤敏文「サッティヤ *sattya-* (古インドアーリヤ語「實在」) とウーシイア *ousia* (古ギリシャ語「実体」) — インドの辿った道と辿らなかった道と —」『古典学の再構築』ニューズレター第九号、二〇〇一年七月、二六—四〇ページ。
- (2) 新月祭、満月祭のウパヴァサタについては、西村直子『放牧と敷き草刈り—ヤジュールヴェーダ・サンヒター冒頭のマントラ集成とそのブラーフマナの研究』、東北大学出版会 二〇〇六参照。
- (3) 阪本(後藤)純子「*ṛiṣṭi-purva-*「祭式と布施の効力」と来世」『今西順吉教授還暦記念論文集 インド思想と仏教文化』、一九九六年、八六—一八八二ページ。

Toshifumi GOTÔ, “*Asvín- and Násatya-* in the Rgveda and their Prehistoric Background”, *Linguistics, Archaeology and Human Past in South Asia*, edited by Toshiki OSADA, New Delhi (Manohar) 2009, 199–226 より

I メルケルバッハ Reinhold MERKELBACH, *Mithras* (ミスラス). Königstein/Ts (Hain) 1984.



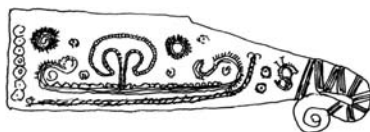
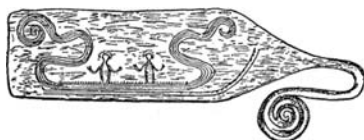
左 : p. 342 f., Abb.101, ドイツ, フランクフルト Nida (Hedderheim) 出土のミスラ教祭壇。左にトーチを下げた宵の明星の神格化 Cautopates-Hesperus (夜), 右に明けの明星の神格化 Cautus-Lucifer (夜明けと昼間)。

右 : p. 321, Abb.72, イタリア, ボノニア Bononia 出土の Cautus-Perses。

Ⅱ ギュンテルト Hermann GÜNTERT, *Der arische Weltkönig und Heiland. Bedeutungsgeschichtliche Untersuchungen zur indo-iranischen Religionsgeschichte und Altertumskunde* (アーリヤ人の世界王と救済者。インド・イラン宗教史および古代学研究). Halle (Niemeyer) 1923, p. 272



南スウェーデン Ryland (Tanum in Bohuslän, イエーテボリ Göteborg の北) の先史時代の岩絵。左に舟, 右に馬, 中央に太陽と思われる人が乗り換えようとしている。連結した螺旋模様は夜の太陽光と昼の太陽光を象徴か。右脇に宵の明星(下向き)と明けの明星(上向き)が役割を交代しようとしている。



左: 同書 p. 273 より, 青銅製剃刀, ユートラント Jutland 出土, 青銅器時代新期。双子 “Gemini” が弾けた太陽光を載せた舟の上に立っている。両掌を上げて掲げる姿勢はインド・ヨーロッパ語族の敬意を示す姿勢で, 『リグヴェーダ』では *uttānāhastā- nāmasā*, 古アヴェスタ語のゾロアスター教典では *ustānazastō nāmaghā* 「両掌を上げ, 敬意を持ち」, ギリシヤ語 *χείρας ἀνασχών*, ラテン語 *palmas tendens* 「両掌を上げて」と表現されるものである (A. KÆGGI, *Der Rigveda* 183 n.173 参照)。

右: p. 275 舟の右に倒立した雁が描かれている。

Ⅲ プロープスト Ernst PROBST, *Deutschland in der Bronzezeit. Bauern, Bronzegießer und Burgherren zwischen Nordsee und Alpen*. (青銅器時代のドイツ。北海からアルプス地方の農耕民, 青銅職人, 領主). München (Orbis) 1999 (Bertelsmann 1996) より。

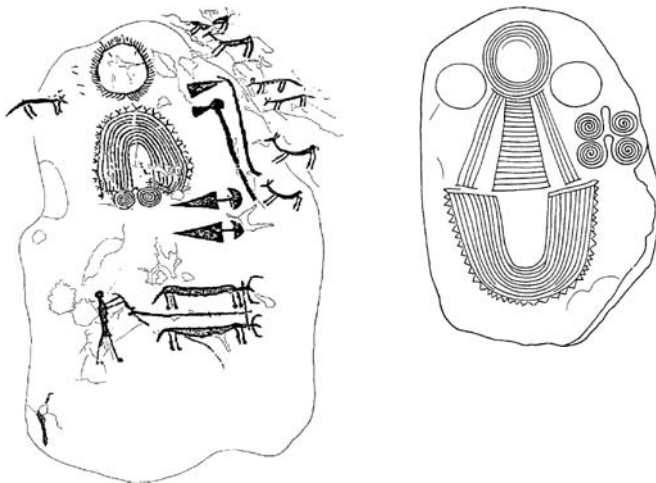


Unten: Bronzenes Rasiermesser mit Schiffsdarstellung aus dem sogenannten »Königsgrab« auf dem »Hoheknapp« bei Harsefeld (Kreis Stade) in Niedersachsen. Länge 15,1 Zentimeter. Original im Niedersächsischen Landesmuseum, Hannover.

左: p. 310, ゴーデンストルフ (ハンブルク郊外) 出土, 青銅器時代新期 (Lüneburg group, ca.1100–800 B.C.)。

右: p. 311, ハルゼフェルト Harsefeld (Kreis Stade), 「王の墓」出土。

IV ギンブタス Marija GIMBUTAS, *The Civilization of the Goddess: The World of Old Europe* (女神の文明。古ヨーロッパの世界), San Francisco (Harper) 1991 より



左 : p. 397, figure 10-43, 北イタリア, ボニョロ Bognolo 出土の石板。前 3000 年頃。

右 : p. 398, figure 10-44, 北イタリア, テーリョ Teglio 郊外 Caven 出土の石板。前 3000 年頃。



Elser der ältesten in der Schweiz gefundenen Metallgegenstände, die 1911 in Font (Kanton Freiburg) entdeckt wurden. Aus diesem Kupferstück in Form einer Doppelspirale. Länge und Breite etwa 10 Zentimeter. Original im Kantonalen Archäologischen Dienst, Freiburg.

V プロープスト Ernst PROBST, *Deutschland in der Steinzeit. Jäger, Fischer und Bauern zwischen Nordseeküste und Alpenraum* (石器時代のドイツ。北海沿岸からアルプス地方の狩猟民, 漁撈民, 農耕民), München (Orbis) 1999 (<sup>1</sup>Bertelsmann 1991), p. 482。

スイスで発見された最古の金属製品, フォント Font (Kanton Freiburg /Fribourg) 出土。銅製, コルタイヨ Cortaillod 文化 (前 4000-3500 年頃)。中央ヨーロッパ東部からの輸入品。



VI Der Schatz aus Troja. Schliemann und der Mythos des Priamos-Goldes. Katalogbuch ; Ausstellung in Moskau 1996 /97 (トロイアの宝物。シュリーマンとプリアモスの黄金。展覧会カタログ). Stuttgart/Zürich (Belser) 1996, p. 182, 飾りピン。前3千年紀後半。

VII Ernst PROBST, Deutschland in der Bronzezeit (Ⅲ参照)



Bronzene Haarknochenfibel mit verzierter Schaumseite aus Grab IV des Hügel 17 von Deutsch Evern (Kreis Lüneburg) in Niedersachsen. Nadellänge 11,5 Zentimeter, Bügellänge 7,8 Zentimeter. Original im Museum für das Fürstentum Lüneburg, Lüneburg.

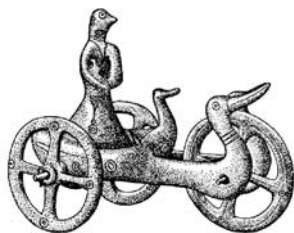


左 : p. 298, 青銅製, 結い髪用留めピン, エーフェルン (リューネブルク Lüneburg 近郊) 出土, 青銅器時代中期 (Lüneburg group, 前 1200-1100 頃)。

右 : p. 336, 黄金製腕輪, カプート Caputh (ポツダム Potsdam 近郊) 出土, 北方青銅器時代後期 (前 1100-800 頃)。



VIII Magisches Gold. Kultgerät der späten Bronzezeit (魔法の黄金。後期青銅器時代の祭礼用具). Germanisches Nationalmuseum Nürnberg (ニュルンベルク国立博物館) 1977 (展覧会カタログ), p. 29 デーンマーク, トゥルンドホルム Trundholm 出土の太陽の車。前1400年頃?



11  
Tonwagen von Dupljaja, Banat (Jugoslawien). Zweirädriger Wagenkasten mit eingeritztem Sonnensymbol, einer plastischen Vogelfigur und zwei Vogelprotomen, zwischen denen ein Rad läuft. Auf dem Wagenkasten steht eine menschliche Figur mit weitem Rock und eingeritzter Schmuckangabe. Länge 24 cm.



p. 34, 粘土製車, セルビア Serbia, ドゥブリャヤ Dupljaja (Vojvodina, Vršac 付近) 出土, 前2千年紀後半。

右の写真は <http://solair.eunet.yu/libcom/pg000003.htm> による。

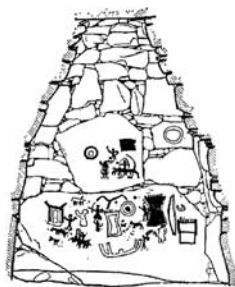
Ⅸ PROBST, Bronzezeit (Ⅲ参照) :



左 : p. 371, 青銅製, ポツダムーアイヒェ Potsdam-Eiche in Brandenburg 出土, ラウジッツ文化 Lausitz culture, (前 1300-800 年頃), 殆ど同一のものがオーデル河畔のフランクフルト Frankfurt/Oder から出ている。

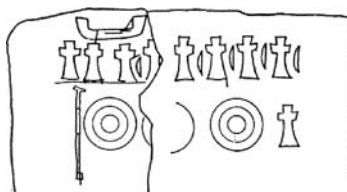
右 : p. 370, 青銅製, アホルズハウゼン Acholshausen (Ochsenfurt, Kreis Würzburg の近く) 出土。後期青銅器時代, 骨壺葬地文化 Urnenfeld culture (前 1200-800 年頃)。

Ⅹ 榊 晃弘・森貞次郎『装飾古墳』朝日新聞社 1972.



五郎山古墳 奥平実図

p. 46 五郎山古墳, 福岡県筑紫野市原田



千金甲第3号古墳 石屋形奥壁の装飾

p. 34 千金甲第3号古墳, 熊本市



XI 『装飾古墳が語るもの』国立民族学博物館編, 吉川弘文館 1995.



p. 13 竹原古墳, 福岡県若宮町



p. 44 鳥船塚古墳, 福岡県うきは市吉井町



p. 12 珍敷塚古墳, 福岡県うきは市吉井町



p. 24 羽山1号横穴, 山形県高島町



p. 24 泉崎4号横穴, 福島県泉崎村

XII 日下八光『装飾古墳の秘密 壁画文様の謎を解く』講談社 1978.



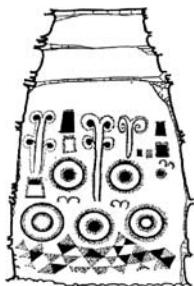
3 王塚古墳新室右側壁(地下段北壁面)

p. 3 王塚古墳, 福岡県桂川町



2 日の岡古墳西壁(地下段北壁面)

p. 2 日の岡古墳, 福岡県うきは市吉井町

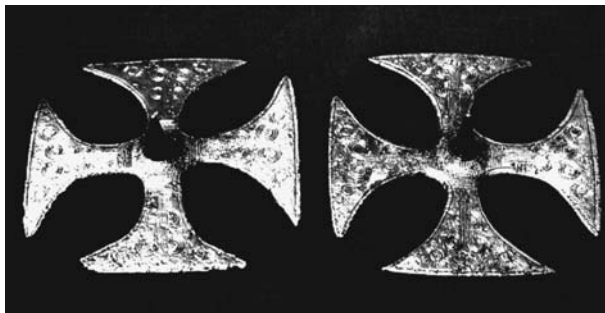


塚花塚 馬宮奥壁文様

榊 晃弘・森貞次郎『装飾古墳』朝日新聞社 1972, p. 19  
塚花塚古墳, 福岡県うきは市 朝田



XIII PROBST, Bronzezeit (→III), p. 247 オーストリア, ピッテン Pitten (Niederösterreich) 出土の飾り板, 墳丘文化 Hügelgräber (tumuli) culture, 前 1600-1300/1200 年頃。



XIV シュリーマン SCHLIEMANN, Mykenae (ミケネー発掘報告書), p. 230 : 第3墓出土の黄金製装身具



305

306

Nr. 303-306. Goldene Ornamente aus dem Dritten Grabe. Halbe Grösse.